

# ③ 母子保健の新たな展開

神山満子

## 一 はじめに

最近、子どもをめぐる問題がさまざまな形で表面化し、各分野で論議されている。たとえば、保健所における電話相談や乳幼児健康診査(以下、乳幼児健診という)をとってみても、乳幼児の生活や母親の子育ての実態、あるいは意識等が大きく変化してきている。では、なぜこのような状況を生み出したのか、そして、このような状況に対し公衆衛生行政の第一線機関として、保健所は地域の子どもたちの健康と全面発達を保障するために、今、どのような役割を担わねばならないのかということについて、過去における実践報告に学びつつ、新たな視点で問い直してみたいと思う。

## 二 保健所からみた母と子

そこで、保健所における電話相談や乳幼児検診等についてとりあげてみたいと思う。まず、相談内容や相談件数が過去

と比較して大きな変化をもたらしている。そして、医学的、神経学的異常がないのに、首のすわりが遅い、腹這いができない、ことばが遅いなど発達におくれがみられる子が多くなっているのである。

この実態に対して保健所としても何とかしなければと、これまで何度か乳幼児検診のあり方をはじめとした母子保健業務の検討を行い、改善をしてきたが、まず、その実態を把握するために港南保健所で五十九年六月〜七月の乳幼児検診来所者の乳幼児の生活と母親の意識調査を行った。それをまとめたものが表1、表2である。

表1の生活状況のうち母親から相談したいこととしてよく出てくるのは、(2)就寝時刻と(5)食事の二点であるが、「夜なかなか寝ない」「食事を食べない、時間がかかる」という形で出てくる。そこで、これらについてももう少し詳しくみてみると、起床時刻が遅いため食欲がない。朝食をきちんと食べていないので途

中でお腹がすきお菓子を欲しがらる。お菓子を食べたので昼寝を食べれないという悪循環を招いていることがわかる。また一方では、起床時刻が遅いので午前中の外遊びの時間がなくなる。そのうえ、母親は午前中に洗濯や掃除を終らせたいためテレビに子守りをさせる。全身を使う遊びを十分にしていなためお腹がすかない。疲れていないので夜になっても眠くならない、というように一つの問題にとどまらず次々と他の問題をひきおこしている。次に、表2

2の母親の意識についてみると、母親が①子育てに必要な基本的な知識がない②方法がわからない③何度か行なったがうまくいかなくてやめてしまった④子

どもの要求に負けてしまふ⑤楽な方を選ぶ⑥親の都合を優先させる⑦できる条件がない、等の状態にあり、子どもはどのような条件の中でどのように発達していくのかということの理解と知識が不十分であることがわかる。ではなぜこのようなことになるのだろうか。一つには、価値観の急激な変化と

- 一 はじめに
- 二 保健所からみた母と子
- 三 全面発達に必要な条件と保健所の役割
- 四 母子保健業務の見なおしと充実
- 五 保健所の役割と課題は

表一 1 1歳6か月児・3歳児の生活状況

	調査対象者	
	1歳6か月児	3歳児
(1)起床時刻—8時以降	1歳6か月児—20.9%	3歳児—21.0%
(2)就寝時刻—10時以降	1歳6か月児—28.6%	3歳児—24.3%
(3)テレビのついてる時間—4時間以上	1歳6か月児—18.6%	3歳児—21.0%
(4)外遊びの時間—1時間以内	1歳6か月児—31.0%	3歳児—11.0%
(5)食事—少食・ムラ食・偏食あり	1歳6か月児—49.0%	3歳児—47.6%
(6)間食—ダラダラ食いや甘い物が多いなど	1歳6か月児—23.3%	3歳児—40.1%
(7)飲物—市販ジュース・乳酸飲料・炭酸飲料などを毎日飲んでいる	1歳6か月児—50.4%	3歳児—55.7%

表一 2 母親の意識（生活状況に問題のある者からのききとり）

四か月児健診	<ul style="list-style-type: none"> <li>・腹這いさせるとすぐ泣くのでかわいそうだからさせない。</li> <li>・あやし方、話しかけ方がわからない。</li> <li>・ことばの意味がわからないのだから話しかけても仕方がない。</li> <li>・おとなしいのであまり手をかけないし話しかけない。</li> <li>・少量しか食べないのに離乳食を作るのが面倒だ。</li> </ul>
起床・就寝時刻	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どうして早く起こさないといけないのか知らなかった。</li> <li>・母親（主婦）の起床時刻も遅い。</li> <li>・朝寝をいれてくれた方が家事はかどる。</li> <li>・父親の帰宅が遅いのでつい大人の生活に合わせてしまう。</li> <li>・父親との接触が夜しかないので仕方なく起こしている。</li> <li>・大人がテレビをみていたので子どもも寝ない。</li> <li>・寝るのが遅いので朝早く起こすのがかわいそう。</li> </ul>
外遊び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・近くに遊び場がない。</li> <li>・どんな遊びをしたらよいかわからない。</li> <li>・近所に小さな子どもがいない。</li> <li>・洋服を汚されるのが絶対にイヤ。</li> <li>・暑いので（寒いので）外へ出さない、テレビをみて過ごす。</li> <li>・午前中はそうじや洗濯をしてしまいたいので外へ出るが遅くなる。</li> <li>・買物のついでに外へ出るだけ。</li> </ul>
テレビ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テレビを消しても、子どもががついてつけてしまう。</li> <li>・テレビをつけておくと、おとなしいので家事はかどる。</li> <li>・父親がテレビをみながら食事をするので消せない。</li> </ul>
食事	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ごはんを食べておくとお菓子をあげてお菓子を出してしまおう。</li> <li>・お菓子をあげてお菓子をあげてお菓子を出してしまおう。</li> <li>・子どもがジュースや乳酸飲料を飲ませないといけないと思ってお菓子を与える。</li> <li>・パックジュースや乳酸飲料を飲ませないといけないと思ってお菓子を与える。</li> </ul>

一歳六か月児・三歳児健診

多様化、それに加えて情報が多く、何を基準に判断すればよいのかわからなくなっている。二つには、家庭や地域の日常生活の場で気軽に相談できる条件がなくなってきた。三つには、母親が不安や問題を何とか解決しようと思っても、一人の力では限界があり主体性を発揮しにくい条件にある。四つには、子どもが人間として全面発達するために必要な生活条件が貧しくなってきた。等の諸条件が複雑にからみあい親自身がこれらの条件を克服していくのをますます困難にしているといえないだろうか。

四——母子保健業務の見なおしと充実

②一点から面へ  
乳幼児健診の結果、ことばや対人関係等の発達の遅れがあり、特にいていねいに意識的にかかわる必要があるケースに対し、従来は心理相談や家庭訪問等で個別に対応したり、他機関へ紹介していたが、それだけでは不十分だといことが

三——全面発達に必要な条件と保健所の役割

①早期発見、早期対応

乳幼児が全面的に発達するために必要な条件には、(1)生活のリズム (2)全身を使った豊かな遊びと豊富な生活体験 (3)共に体験を共有し、学び、発達しあえる仲間の存在 (4)質の良い食事、睡眠、排泄等 (5)これらを可能にする家庭、地域環境等があげられるが、これらの条件を整えることは母親だけあるいは家庭だけでもできない。やはり、親をはじめ地域の人たちが連携、協力しあわなければならない。では、保健所の役割とはいったい何であらうか。それは、ある面では母親たちが主体的に子育てができる力、そして、そのために必要な条件を整えていく力をつけることにあるともいえるであろう。具体的には、(1)母親が主体的な学習や実践の必要性に気づく援助 (2)個と個を結びつけ、母親たちが問題を共有し、共に学び、実践できる仲間ができるように援助する (3)乳幼児の発達のみならずじやかわり方等の学習活動を援助することではないだろうか。

従来、保健所としても地域のすべての乳幼児が健康で順調に発達してほしい、病気や障害の発見が遅れたり、対応が遅れて不幸な結果にならないようにと、乳幼児健診を充実させる努力をしてきているが、地域の母と子に責任あるサービスをするためにほひとりひとりの母と子の実態を正しく把握し、適切な対応が必要である。そのため、まず、受診率を高める努力をし、実施月齢を発達の節目にあわせ、異常の早期発見、早期対応の努力、発達のみならずじや発達を促すために生活の場でどんな条件が必要か等を母親が理解し、実践につなげる指導、そして、仲間づくりのきっかけづくり等目標に指導するように努めている。

その結果、まだ改善点や充実せねばならない点はたくさんあるが、異常や遅れが早期に把握できるようになり、以前に比べ早期に対応できるようになってきている。

わかり、集団指導の場を新たに設け、具体的な遊びを通して乳幼児へのかかわり方を学びあったり、理論学習の機会を作っている。そして、そこから自主的なグループに発展していったものもある。この部分は療育や障害児保育の部門とオーバラップするが、〇・二歳児についてはそれらの部門の受け皿が殆んどない現状で、かなりの部分を保健所が担っているといつてよく、今後の課題の一つである。

妊婦と保健所の最初の出合いの場は母子健康手帳の交付時であるが、それは母親教室や父親教室の受講、あるいは乳幼児検診の受診につながり、またそのことを通じて乳幼児の全面発達のためにはどんな条件が必要なのか考えられる母親になるためのきっかけづくりの場になっている。つまり逆にいえば、母子健康手帳交付時の指導の充実が母親教室や父親教室の受講率、あるいは乳幼児検診の受講率を高め、その後の仲間づくりにも良い影響を及ぼすことになるのではないかと。

母親教室は義務出席ではない、受講者は少なくとも「参加してみよう」と思っ行動をしたという意味では主体性があるわけであるが、この主体性をより発展させるために、従来のような講義中心でなく、地区別のグループに分かれ自己紹介をしたり、講義の感想を述べあい、受

講者同士の交流の場を設けている。中には、そこから同窓会に発展し、定例的に集り、お互いの悩みや体験を出し合ったり助言しあう場になり、出産後は子育てグループへ発展していったものもあり、その発展の過程を整理してみると表1-3のようになる。

③ 父親へのアプローチ  
 以上のことは家庭を内的側面とすればいわば外的側面からみたことであつたが、次に内的側面から見た問題についてふれてみたいと思ふ。たとえば、「子どものことを父親に相談してもそれは母親の役目だといつて相手にしてくれない」「休日家でいて母親は意外に多い。中には一人で担わねばならないへんきに涙ぐむ母親もいる。仕事に追われ、遠い勤務先、朝早く

表1-3 母親教室から子育てグループへの発展過程

事業名	組織的段階	働きかけの段階	活動の内容や組織の変化
母子健康手帳交付 妊婦相談	個がバラバラ	きっかけづくり	<個人指導・集団指導> ・母体の健康—妊娠の生理と生活上の注意等 ・乳幼児の健康と全面発達のために一発達のみちすじと親の役割 ・母親教室・父親教室の受講の勧め 乳幼児健診の意義と受診の勧め等
母親教室	集まっている個がバラバラ(集合)	外部からの援助が個と個をつなげる	<講義・実習・地区別グループワーク> ・自己紹介、住所録作成 ・今、困っていること、不安なことなどを出し合う ↓ また、みんなと会いたいね
母親教室同窓会	他律的集団	外部の援助で主体性を発揮	<第1回目3人でメンバー宅に集まる> 保健婦にも出席依頼がある 集会所を借りるため、保健婦と一緒に自治会役員に主旨を説明に行き、理解を得る <月1回定例的に集まるようになる> 保健所の母親教室未受講者も誘って参加、出産して赤ちゃんと一緒に参加する人も出てくる ・自分たちの具体的な問題を出し合い、共通の問題の中からテーマを決めて、調べたり学習会を持つたりする。 ・みんなの意見を大切に、それらを活動のために反映させるために運営委員会が必要になり、役割分担等も決め自主的に動き始める
子育て教室	自律的集団	外部の援助なしで主体性を発揮	<子育てグループが独立していく> ・時々、妊婦グループと子育てグループが合流し、先輩の体験から学ぶ ・自分たちで活動計画を立て、進める ・他の子育てグループと交流したり、一緒に講師を招いて学習会をもつ ・母親たちの方から外部の人を活用するようになる など

う。たとえば、「子どものことを父親に相談してもそれは母親の役目だといつて相手にしてくれない」「休日家でいて母親は意外に多い。中には一人で担わねばならないへんきに涙ぐむ母親もいる。仕事に追われ、遠い勤務先、朝早く出て夜遅く帰宅する毎日では父親の責任を果たしたくてもできないという人も多いだろうが、一方では父親の責任や役割の大きさを認識していない人も多いようだ。港南保健所では五十四年から父親教室を実施しているが、当時核家族率が八〇%という状況をふまえ、母親だけでは安定した子育てができない、母親を支えるべき父親にも学習の機会を提供し、一緒に育児について考え、実践してもらおうと開始した。内容は妊娠中の夫の役割と生まれてからの父親の役割が主で、乳幼児の発達のみならずを中心に具体的な

毎回、受講者から意見や感想をきき、内容や方法を充実させてきた。参加者から出された感想には、「出席するまでは照れくさかったが、妻の熱心な勧めで出た。出席してよかった」「今まで妊娠していることがこんなたいへんなことだとは思わなかった。これからは妻をもっと大切にします」「子どもの発達段階に応じてきちんとかわかってやらねばならないことがよくわかった」「先輩父親の話が具体的でとても参考になった」とほとんどの人が述べており、年々受講者が増えている。また、その後、受講者に育児への関与度等についてアンケート調査した結果でも、抱っこをする、あやす、腹遣いにさせる等、殆んどの人が積極的に育児に関与している。

以上、港南保健所の実践例を中心に述べたが他の保健所ではどうであろうか。二・三の所を除いた殆んどは保健所で、同じようにその地域の実情に即してさまざまな試みをしている。父親の学習の場については、特に父親教室という独立した形ではないが母親教室の中には父親も参加する日を設けている所が多い。

そして、母親に対しては母乳教室、子育て教室等の名称で、また、発達の遅れがあり特に意識的にかかわらねばならな

いケースに対しては遊びの教室、親子教室等の名称で集団指導の場を設けて地域のグループ作りへつなげる努力をしている。

このように、全市的に広がってきたとりくみをみると、各保健所の職員同士が実践の交流をし、他の実践からお互いに学びあい地域に広め、質的に高めていっていることがわかる。

## 五——保健所の役割と課題は

ひとりひとりの母親が乳幼児の全面発達のために、生き生きと子育てができ、また、地域の中で、子育てに必要な条件を築いていく推進力になるためには、日常生活の中で、共に学びあえ、実践できる仲間が必要である。従って、保健婦が行う保健指導や援助は、人と人をつなげ、母親たちの主体的活動につながる組織的な側面と、知識や考える素材を提供する技術的な側面を常に兼ねそなえていなければならないといえる。また、いくつかのとりくみの経験からいえることは、どの場合も保健婦のチョットした声かけで比較的簡単に集まっていることである。それだけどの母親も、「誰かに相談したい、きいてもらいたい」という要求

を持っていろいろのだろう。だからそのきっかけづくりをする人が必要なのである。次に、そのように人が集ったら、ただそこに集合しているという状態ではなく、ひとりひとりを関係づけていく働きかけが必要になる。

それまでは個人個人バラバラで関係がなかった人たちが、何かのきっかけで同じ場所に集まるわけだが、それらの人たちを相互につきなぎ、メンバー自身が共通の問題、目的をもつ新たな関係をつくっていくように援助する。

そのような過程の中で自分たちの力で考えたり、実践をくりかえし、やがては自律した集団になっていくようにすることである。しかし、これらのことはかなり意識していても、母親たちの意思を十分にきけなかったり、あるいはききとる力がなかったり、こちらの思いを一方的に押しつけてしまったり、母親たちの主体性を無意識に踏みにじっている場合がよくあり非常に難かしいことだと思ふ。また、保健婦は文字どおり保健の側面から住民にかかわっている。保健の問題は労働、食事、住居、経済等、さまざまな条件に影響される。そのため、保健のとりくみだけでは本質的な問題は何ら解決しないわけであり、いろいろな分野の

人との連携が必要である。そして、お互いの機能や役割等について相互に理解を深めることも重要であろう。また、一つの事業を充実させるだけでなく、すべての母子保健業務を系統的、総合的に進めていかねばならない。

しかし、これらを現実のものにするには、十分なマンパワーと時間が必要であるが、現在のように目の前の仕事をこなしていくのに精一杯の状況の中ではかなり難しい問題がある。また、マンパワーと時間が必要な割にはその効果がすぐ数字となって表われないため、重要な業務であるにもかかわらず評価されにくい面もある。が、だからといって条件がないからできないというのではなく、まず、現場でできることから一つ一つ実践し、お互いの実践と理論から学びあい質的に高めていかねばならない。そして、その過程の中でまわりの人たちの理解と協力を得、マンパワーの確保もしていかなければならないのだと思う。これらの実践の積み重ねがやがては乳幼児の健康と全面発達を保障するためのシステムづくりにつながっていくのではないだろうか。

△衛生局保健指導課指導係▽